英語教育改善プラン推進事業

第1回ワーキング（高校班）

令和3年6月23日（木）15:45 ~16:45

山梨県総合教育センター

高校教育課

分科会　次第（15：45～16：45）

（１）はじめの言葉
（２）事務局より【15分】
（３）各校の研究について
　　（主に3つの柱について状況報告）　　【15分】
（４）指導助言【25分】
（５）諸連絡
（６）終わりの言葉

ワーキンググループ（高校）メンバー

○有識者アドバイザー　：亀谷　みゆき　教授（朝日大学）

○研究指定校担当者　：青柳　正樹　先生（甲府昭和高校）
　：小林　康仁　先生（富士河口湖高校）

○英語教育推進リーダー：田中　知聡　先生（甲府昭和高校）

○指導主事　：小林　久美　先生（総合教育センター）
　：野澤　俊英　先生（総合教育センター）
　：角田　恵一　（高校教育課）

課題の所在

県全体として（令和2年度英語教育実施状況調査から）

①CAN-DOリスト形式による学習到達目標の設定：100％

しかし

生徒に配布されず、共有されていないケース有り

つまり

生徒の学習状況の把握が教師による一方向なもの

生徒自身が「CAN-DOリスト」を学習到達目標として

活用していない状況

課題の所在

県全体として（令和2年度英語教育実施状況調査から）

②第3学年に所属の生徒のうちCEFR　A2相当以上：48.4％

しかし

入試に英語外部検定試験利用が求められる初年度のため？

今後も継続して**卒業生の半分はCEFR　A2相当以上の英語力を有するような指導の在り方**

（外部検定試験の受験、授業での生徒の力の見取り）

課題の所在

県全体として（令和2年度英語教育実施状況調査から）

まとめ

CAN-DOリスト形式による学習到達目標の設定と活用が、生徒の英語力の伸長に活かされていないことが考えられる。また**パフォーマンス課題の実施**は増加傾向にあるが、その**指導と評価の妥当性と系統性**という面では改善が必要である。

課題の所在

研究指定校の実施計画書から

甲府昭和高校

〇生徒

　英語学習に対して苦手意識を持っている生徒が多いが、授業に対しては前向きに取り組んでいる。準備した上での言語活動に対しては抵抗なく行えるが、**即興でのやり取りには課題**ある。

〇教師

　英語の４技能５領域を向上させるため、授業内でパフォーマンステスト等を行っているが、卒業後のあるべき姿をイメージした**指導目標（方法）、評価基準（方法）が学年を越えた教員間で共有できていない**。

課題の所在

研究指定校の実施計画書から

富士河口湖高校

〇生徒

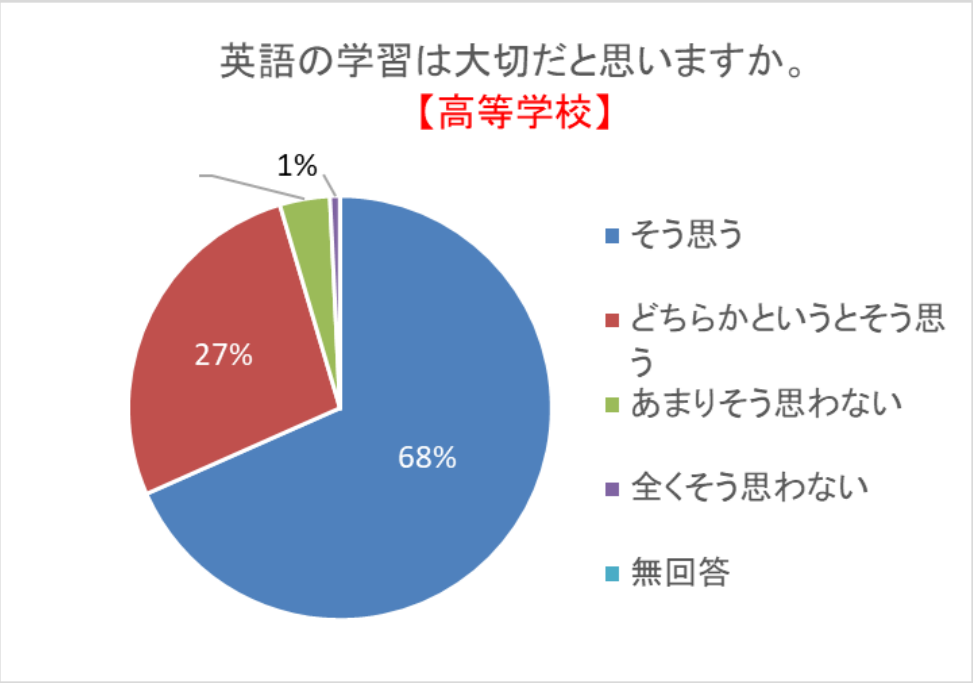
「**英語に興味があるけど苦手**」という生徒が多い。英語の成績が校内相対的には良好な生徒であっても「英語は苦手教科である」と答える生徒もおり、中学校までの英語学習の中で英語に対して向き合い、何かしらの困難を感じている可能性がある。**コミュニケーションに必要な基本事項**が抜けている生徒が一定数存在している。そのことに自覚的な生徒もおり、学びの「抜け」が要因の一つとなり「英語が苦手」と感じることのないよう配慮する必要がある。

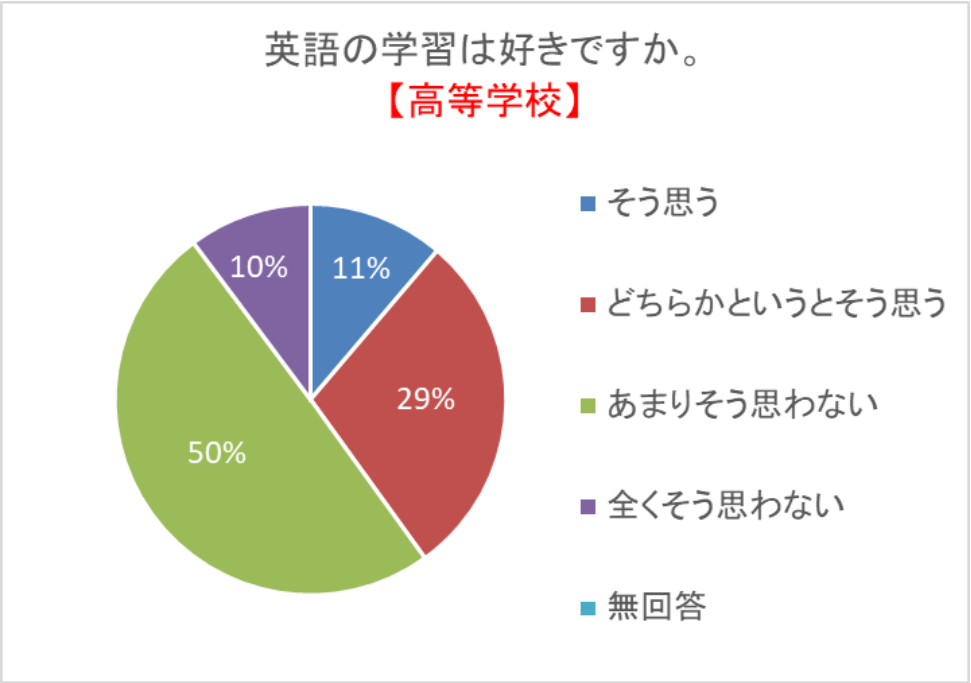
〇教師

様々なアイデアでの指導を実践している反面、その指導が、年度当初に設定した年間のシラバスに沿っているのか、また**Can-doリストのどの部分を目標にしていて、各単元や各時間で生徒が何をできるようになっているべきなのかを、教員間で共有**しながら進めていく必要がある。

4月アンケートの結果から

生徒

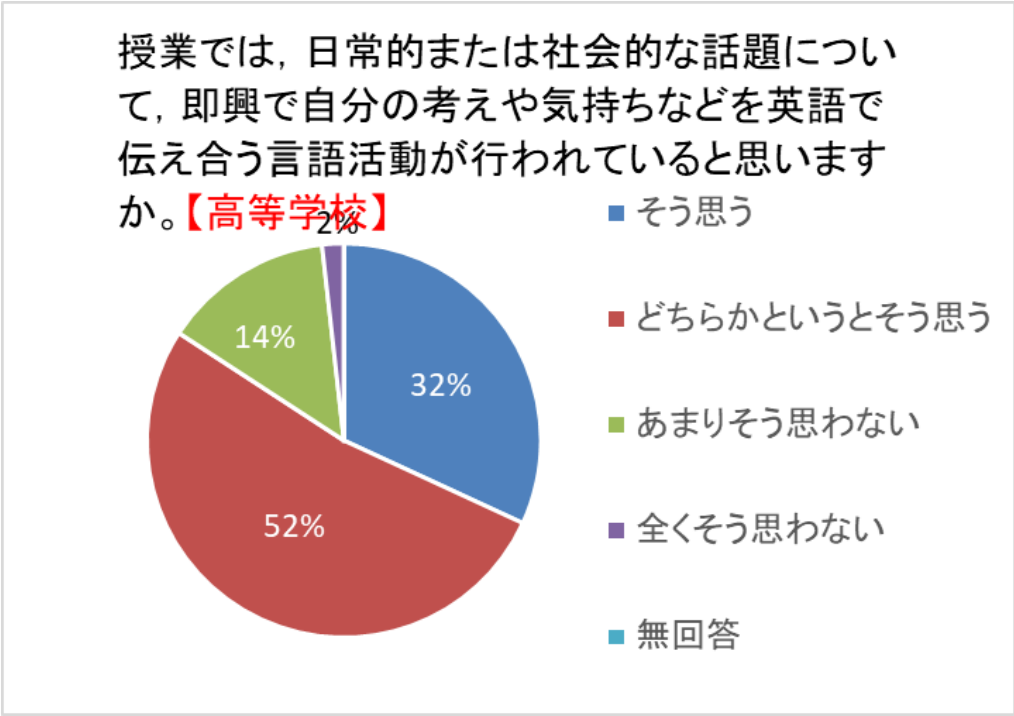




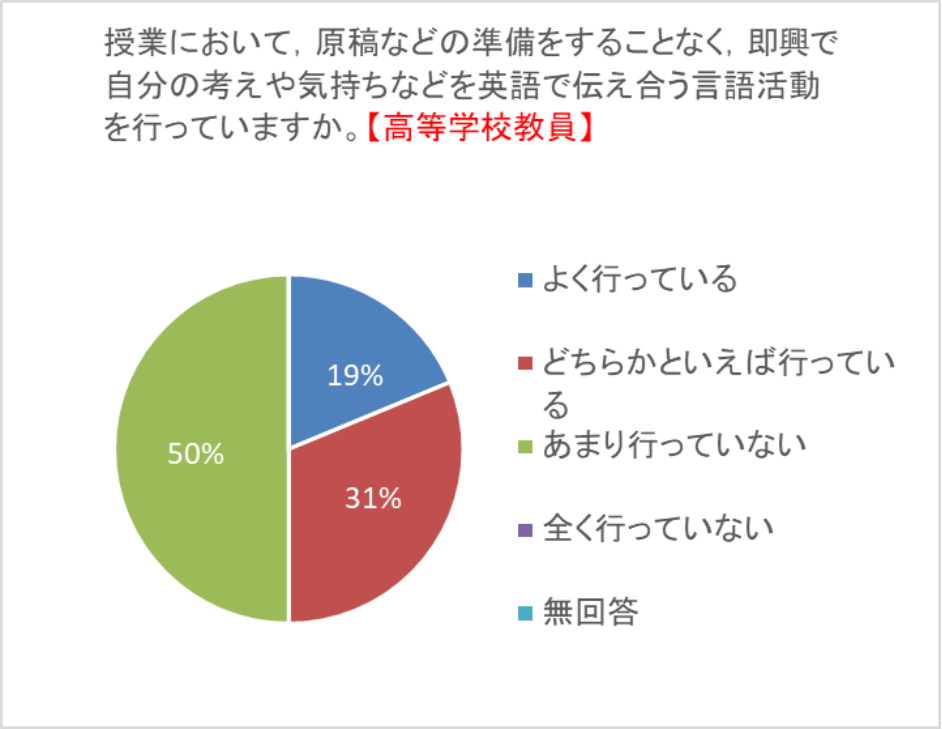
英語の学習は大切だと思うが、好きではないという生徒が過半数

4月アンケートの結果から

生徒



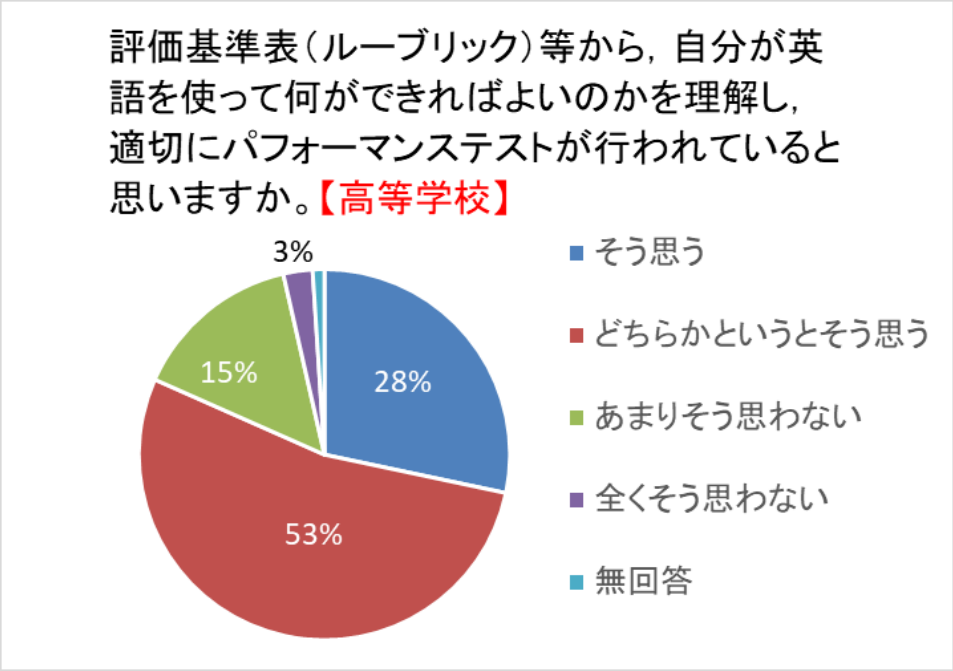
教員



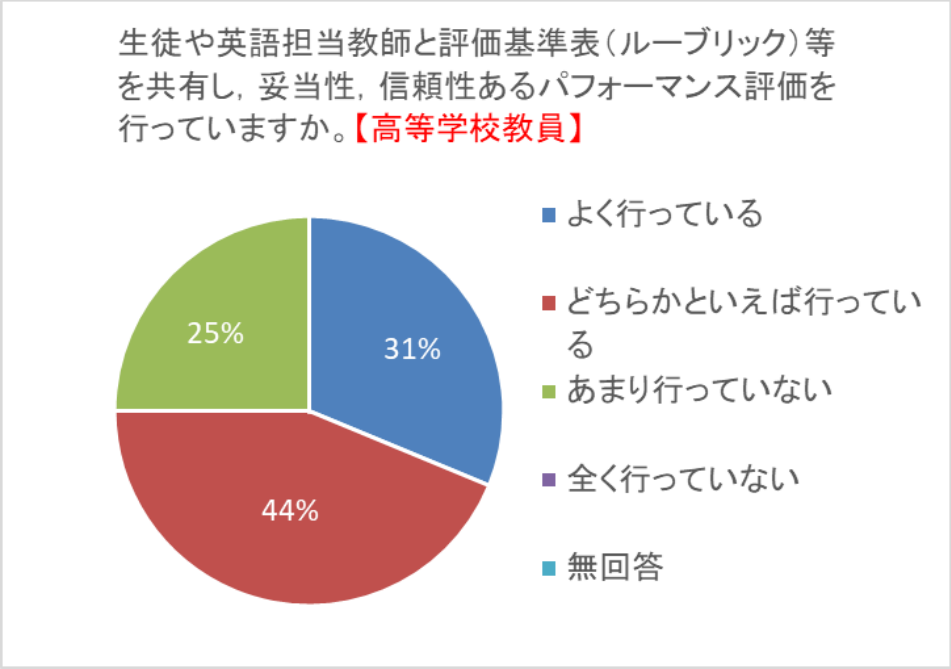
生徒は中学での活動のイメージから回答→高校入学後にギャップあり？

4月アンケートの結果から

生徒



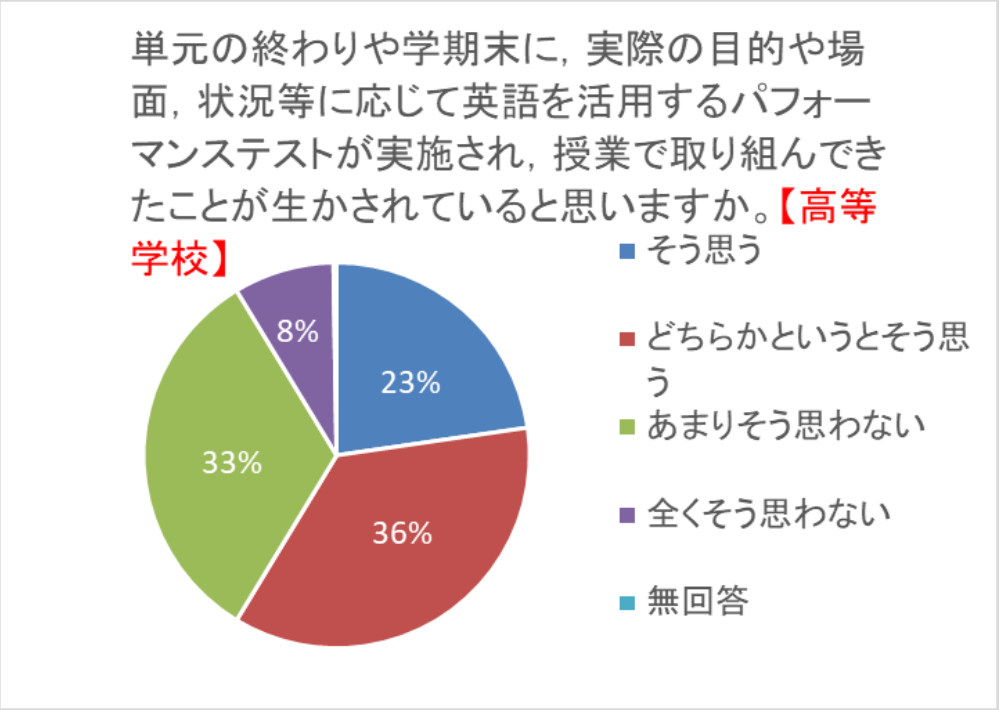
教員



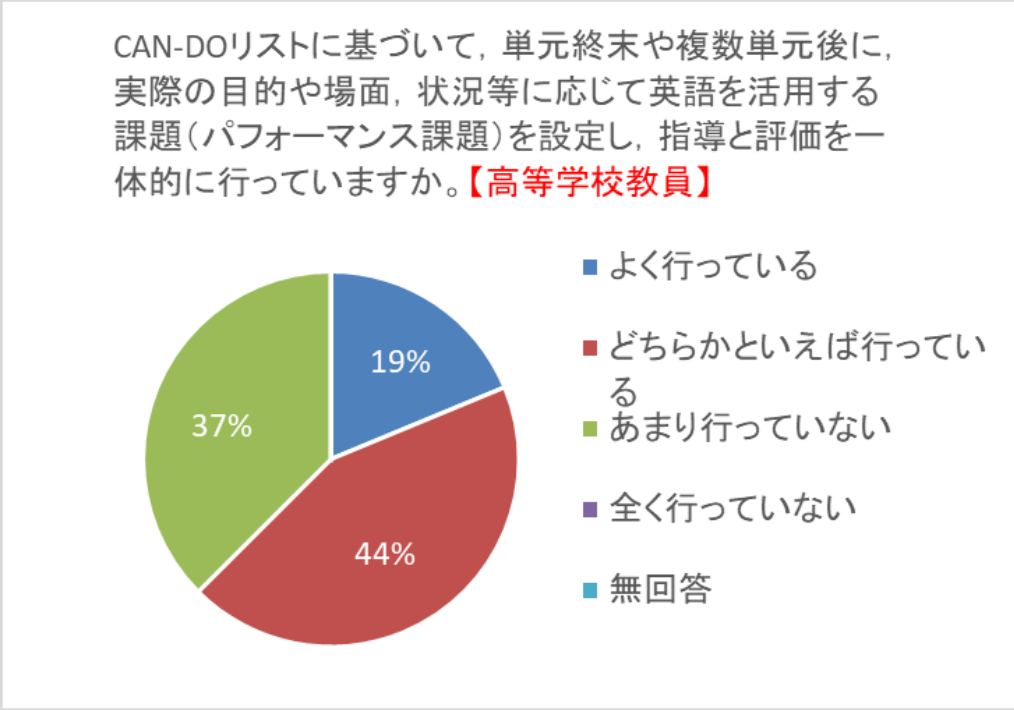
ルーブリックを生徒と共有したパフォーマンス評価の実施について改善の必要性

4月アンケートの結果から

生徒



教員



単元末などでのパフォーマンス課題の実施、その指導と評価には改善の必要性あり

本事業の目的

①**小・中・高等学校**を通じて、

②グローバル社会に生きる児童生徒に求められる**英語による発信力**を向上させるために、

③実際の目的・場面・状況に応じた英語を活用する課題（**パフォーマンス課題**）を設定し、

④**指導・評価するモデル**を構築する。

Yamanashi　Modelの構築

～話すこと［やり取り］を中心とした発信力向上をめざして～

3つの柱

①話すこと［やり取り］

②言語活動

③パフォーマンス評価

3つの柱を支えるものとして

ルーブリック（新CSの3観点による観点別評価を念頭に）

振り返りシート（ポートフォリオ）

CAN-DOリスト（4技能5領域版）

小・中・高連携（情報交換・交流・目標と評価の共有）

事業に関してお願いしたいこと

- **日々の授業改善・指導改善につながる取り組みに**

→学校・教科で**組織的に**取り組む。
→日々できることを積み重ねる。**授業実践の記録（映像・資料）**
→事業が終了しても、継続して行える取り組みに。

- **上手くいかないこと・失敗から学ぶ姿勢で**

→実施してすぐに効果がでることの方が少ない。
→PDCAサイクルを回して、次に繋げることを念頭に。

今後の日程・取り組み

・7月までの間に「話すこと［やり取り］」のパフォーマンス活動の実施

・8月5日の教育課程研究集会および10日の小・中・高の連携研修会で本事業の取り組み（途中経過）について発表（今年度は富士河口湖高校）

・9月9日（木）第2回ワーキング実施「実践からの改善など」

9月以降12月までの間に授業実践を行い、授業を撮影（配信も可能であれば）

・1月中に2回目のアンケートを実施

・2月22日（木）第3回ワーキング実施「今年度の反省と次年度の課題」

本年度のまとめとして報告書を作成